第５分科会　今日的な課題・地域性等を生かした道徳教育

助言者　芽室町立芽室西中学校長　　椿原　雅章

１　北見市立東相内小学校の提言『地域の教材を活用した道徳教育』について

本提言の特筆事項は、「良いあいさつとはどんなあいさつか」における「考え、練習する実践」につきると思う。学習指導要領における道徳の目標においても、従前の「道徳的実践力を育成する」ということを、より具体的に「道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」とあらためたように、これまで机上座学と単純な体験、見聞で済ませがちだった活動を、「考える」という主体的な思考活動を通じていかに「良さ」に近づくかを思考・判断し、さらに「練習」という自己内の価値化を通して「スキル」として汎化させている。道徳のカリキュラム展開をここにシフトできたことは、小さなことと見えて実は大変に意義深いものである。新学習指導要領における教科の指導及び学習評価と同軸に考えても、技能や知識を生かして思考したり、複数の知識を比較検討して判断したり、さらに多くの知識や技能を用いて表現したりできて初めて、事実としての知識が習得されたかどうかだけでなく、深い学びとしての「習熟（概念的な理解）」にまで到達させる可能性を秘めている。道徳は、長く続いた「多くの名も無き名人」の時代に、ともすればイデオロギー的、観念的な淵に落ち込みかねなかったものが、教科化を機に教科書やいわゆる別葉が整備され、領域を合わせ、教科横断的に取り組まれるようになった。「考え、議論する道徳」への進化も急速に進んできた。一方、その過程でよく聞かれたのがやはり、「『自然愛護』とか『感動、畏敬の念』、難しいよね」「評価もどこを見取ればいいのでしょうか」という声である。価値項目やテーマが大きいだけに、考えるだけ、議論するだけ、ではなかなか「自分ごと」として落ちきらず、不完全燃焼感が残るのであろう。しかし、本提言のように、考え、議論し、さらに行動に般化させる取り組みを精選して実践できれば、そこに克服へのヒントがあると思います。例えば、あいさつ運動と連携して、「考え、練習する」実践を児童会に移行して引き継ぎ、地域の方々も巻き込みながら、「良いあいさつ」を追究させるのも、地域へのかかわりを考える上で一助となるのではないだろうか。

２　日高町立日高中学校の提言『地域の特色を生かした体験的な活動』について

道徳の研究会提言としては「？」と感じる向きもおられるかもしれないが、本提言からは、今も多くの中学校が取り組んでいるであろう、総合的な学習のカリキュラムの充実に関して、多くの示唆を読み取ることができるのではないか。新学習指導要領が完全実施されたが、総合的な学習の時間の全体計画や年間指導計画、評価規準といったあたりは、改訂、改善に向け現在も試行錯誤を続けている学校（本校も含めて）は少なくないと推察する。また、折から、どこの自治体でも２０４０年問題に向けた取り組みを、官民はもちろん、行政と教育が一体となって行う上で、「ふるさと教育」という表現で地域を見直す学習の位置づけとか、地域社会との連携協働体制の明確化が教育行政執行方針で骨太に打ち出されているはずである。私はここに、本分科会の目指す「今日的な課題・地域性等を生かした」道徳教育の実践のヒントがあると考えます。今すべての学校が目指す「社会に開かれた教育課程」を実現する上でも、また、道徳の指導内容の取り扱い留意点にもある「家庭や地域社会との共通理解を深め、相互の連携を図る」ためにも、地域に根ざした総合的な学習と道徳との連携は不可欠である。まさしく、提言中にあるように、「（総合的な学習の）広がりや繋がりは、道徳教育はもちろん、学校の教育活動全体にも影響を与え、生徒を成長させている」のである。単に総合的な学習を展開していく中に、「郷土愛」という価値項目を見いだした田下先生に対し、『ボヤッとするゾ・・・』とアドバイスを送り、このことへの気づきを導かれた校長先生のご慧眼まさに恐るべし、と拝察する次第である。今こそいわゆる別葉を精査し、各教科、各領域との関連を整理し直すとともに、特に、道徳と特別活動、道徳と総合的な学習のかかわりにおいて、ねらい、内容、評価規準といった事柄を、有機的に時間軸の前後で関わり合うよう、カリキュラム・マネジメントを進めてみてはどうだろうか。ラフティングの水の冷たさを忘れぬうちに。この経験から導かれる道徳的価値を補充、深化、統合するために。